

《わがまちのお宝 時津町》

時 津 街 道

時津町企画財政課
時津町民俗資料館

時津街道は、江戸時代、長崎街道（長崎～小倉）の裏街道として盛んに利用されました。その行程は、長崎市の西坂から時津港までの3里（約12キロ）と時津港から彼杵（東彼杵町）までの海上7里（約28キロ）でした。天気が良ければ、長崎の矢上廻り（諫早・大村を経由）の陸路15里（約60キロ）よりも旅程を1日短縮できました。

長崎は、南蛮貿易港として開港以来、中国・南蛮・西洋の文化が流入し、世界との窓口として発展しました。同時に時津街道を往来する人や物流が盛んになり重要な道路となりました。幕府の廻国使小出対馬守外幕臣・島原一揆を平定した松平信綱・大村藩主・長崎奉行及び役人・オランダ商館長・大田南畝をはじめ、多くの武人・文人墨客が往来し、時津は、大きな宿場町として発展したと思われます。

また、26聖人が時津港に上陸し、役人に監視されながら西坂刑場へ向かったこの街道には、追分けの道にさしかかると左手に長与への往還道、藩主・長崎奉行等が休憩したと言われる茶屋（本陣）、今にも落ちてきそうな奇岩「さばくさらかし」、牛や馬の尻をむち打ちながら登った難所「打坂」などがあります。



時 津 街 道

① 時津港（時津波止場跡）

時津港は、時津～彼杵間の海路の発着地であり、長崎への陸路の始まりの地として賑わいました。時津港の場所はいろいろな説がありますが、江戸時代末期ごろは、現在の時津公民館別館あたりに時津港があったと推定されます。

『大村郷村記』によると、波戸の長さは56間（約101.8m）あり、内13間（約23.6m）は袖でした。横は4間（約7.2m）でした。この波戸は、古来からありました。

干潟が増し、遠浅になって船着きが悪くなったので、文政6年（1823年）の正月に長さ30間（約54.5m）、横4間（約7.2m）を船つなぎとして、波止先より右へ袖10間（約18.1m）築き出しました。

天保9年（1838年）の3月、更に長さ10間（約18.1m）を築添えし、袖10間（18.1m）は、以前のとおり波戸先へ直しました。この波戸は、例年長崎奉行並びに御目附役の見聞が行われていました。

※『大村郷村記』……旧大村藩領東西両彼地方の詳細な農村調査書であると同時に、藩権力による一般の総合調査書。大村藩が天和元年（1681年）以来、180年の歳月をかけて完成させた。

◇日本26聖人上陸の地碑

26聖人とは、約400年前、長崎市の西坂で処刑されたキリスト教信者のことです。

キリスト教を初めて日本に伝えたのは、天文18年（1549年）スペイン人のフランシスコ＝ザビエルです。

この後、たくさんの宣教師が日本に来て、キリスト教やヨーロッパの進んだ学問を伝え、キリスト教の信者は増えていきました。



26聖人上陸の地碑

はじめのうち、織田信長や豊臣秀吉は、このことを大いに歓迎していましたが、ある事件がきっかけで、キリスト教を禁止するようになりました。

ある事件とは。ある日スペインの船が土佐（今の高知県）に流れ着きました。その船に乗っていたスペイン人が「われわれは世界最強の軍隊をもっている。日本もおとなしくしなければ領土にしてしまうぞ」と言った言葉を聞いた豊臣秀吉は、京都と大阪にいる宣教師と信者をただちに処刑するよう命じました。

慶長元年（1596年）26聖人は、もともと24人で、京都で耳そぎの刑を受け、大坂・堺の町中

を引き回されて、長崎へと出発しました。途中、岡山で、2人の信者がこの一行に加わり26人となりました。首になわをかけ、両手をしばられたままの姿で歩き続け彼杵につきました。そこから小舟に乗って大村湾を渡り、2月4日夜11時ごろ、時津へ着きました。雪の降る中で、空腹と寒さと疲労に耐えながら、船の中で最後の夜を過ごしました。

そして、次の朝早く、西坂の処刑場へ向かい、十字架にはりつけにされて最期をとげました。

② 茶屋（本陣）

茶屋（本陣）は、大名や幕府の役人が宿泊したり、休憩をした宿を指します。時津の茶屋（本陣）は、大村藩営のもので、はじめ、寛永10年（1633年）に浦郷の市場の近くに建てられましたが、その後、現在の場所に移築されました。現在の建物は、嘉永元年（1848年）に改築されたものです。



茶屋（本陣）

かつて時津は、長崎街道の裏街道として利用された時津街道の宿場町で、交通の要衝の役割を担っていました。茶屋は、かつて時津が時津街道の宿場であったことを今に伝える重要な建物といえます。

平成7年には、茶屋の門が町文化財の指定を受けています。

③ さばくさらかし岩

さばくさらかし岩（別称：継石坊主）は、絶妙なバランスで重なる姿と、ユニークな名前がよく知られています。徳川時代一世狂歌師として有名な蜀山人、大田南畝（長崎奉行所勘定方）が長崎在勤中の文化2年（1805年）に時津に遊び、この奇岩を眺めて、「岩角に立ちぬる石をみつつおればになえる魚もさはくちぬべし」とうたったので、一躍有名になりました。

さばくさらかし岩は、平成13年12月28日に記念物（名勝）として町文化財に指定されました。



さばくさらかし岩

④ 愛の地蔵

戦後間もない昭和22年（1947年）9月1日、打坂峠で悲しい事故がありました。

その日、長崎自動車会社（長崎バス）の車掌だった鬼塚道夫さん（当時21歳）と約30人の乗客を乗せた木炭バスが打坂峠の坂の途中で故障しました。ギアシャフトが外れ、ブレーキがまったく効かなくなったバスは、勾配が20度もある急坂をズルズルと後退し始めました。そのような状況のなか、バス乗客の命を守るため、鬼塚車掌は自ら体を張って輪止め（車のブレーキ）となり殉職しました。当時の打坂峠は、くねくねと曲がっていて、バスの運転手から「地獄坂」と呼ばれていました。当時の馬力のない木炭バスにとっては、つらい急な坂道でした。

この事故から27年後の昭和49年（1974年）10月19日、長崎自動車株式会社は鬼塚車掌の勇気をたたえとともに、交通事故をなくそうと、元村郷打坂の事故現場に慰霊地蔵尊を建立し、入魂式を行いました。鬼塚車掌の命日である9月1日には、毎年供養祭が行われています。

当初は、鬼塚地蔵尊と呼ばれていましたが、平成5年（1993年）に『愛の地蔵』として本に取り上げられたことから、名前を「愛の地蔵」と改称しました。

※入魂式……仏像、仏画、仏壇、墓などの完成の際に営まれる法要。

※『愛の地蔵』……吉田理 著（近代文芸社、1993）



愛の地蔵

このように時津街道には数多くの歴史が刻まれており、昔も今も主要路として利用されています。

これまで、時津街道を中心にまちのお宝を紹介してきましたが、時津町には長崎開港の祖といわれる長崎甚左衛門の墓（県文化財指定）や300年以上の歴史を持つ浦郷ペーロン、郷土芸能など、まだまだ伝えきれないものがたくさんあります。

これを読んでいただいた皆さまにも、この機会にぜひ時津町に興味を持っていただければ幸いです。